

来迎院如来蔵『讚阿弥陀仏偈』の本文と訓点

——良忍手沢本、教行信証、円空本模写本、南條本の比較を通して——

金子 彰

一 はじめに

「曇鸞撰『讚阿弥陀仏偈并論』の原初形態の復元とその思想史的意義」（加来雄之代表）の研究員として、大原来迎院蔵の良忍手沢本を中心にして、大谷大学円空本模写本、親鸞の教行信証、南條本の本文と訓点（仮名訓）とを比較整理して、良忍本の語学的特徴と、良忍手沢本以降の伝承の実態を記述するものである。

1、来迎院如来蔵本について

来迎院は魚山と号し、天仁二年（一一〇九）良忍の創建に係る。円仁が仁寿年間（八五一―五四）に唐から声明をこの地に伝え、良忍がこれを中興し声明音楽の根本道場となったことは周知の通りである。来迎院如来蔵本の語学的特徴については、築島裕博士の御高論がある¹。来迎院蔵本は純粹な天台系の言語を継承したものと見られる。

ヲコト點の種類を手掛りとして、その寺院に傳來してゐる訓點資料の性格を検討することが可能である。（中略）その一つは、その寺の主として屬する宗派のものを中心として、その他の宗派のものは含まない、「純粹派」の類であ

り、(中略)一つの宗派に限られてゐる「純粹派」の例としては、天台關係に比較的多く見られるやうであつて、具體的には來迎院如来蔵・曼陀院などがそれに該當する。(中略)來迎院如来蔵を見るとヲコト點加點本二十三點の内天台宗關係のものが、實に二十二點を占め、それ以外のものは僅に一點のみに過ぎない。

來迎院所蔵本の調査は古くから行われ、その蔵書目録²が作成されている。良忍自筆、手沢類十五部中の『讚阿弥陀仏偈』は、第一箱法函七六本(良忍自筆、手沢類十五部、聖教類五八部、文書一二二通)に収蔵³の由である。

2、良忍について

良忍(延久五年(一〇七三)―長承元年(一一三二))は叡空の師であり、叡空―源空―隆寛―親鸞という師弟關係であることから、日本浄土教の展開における曇鸞浄土教の影響を考へるうえで注目すべき人物である。略年譜⁴によると『讚阿弥陀仏偈』手沢は良忍二十七歳の若き日のことである。

一〇七三年 出生 尾州富田の人。俗称は秦氏。

一〇八四年 十二歳 比叡山檀那院良賀より天台教觀を学ぶ。東塔東谷の阿弥陀房の堂僧(合唱僧)を勤める。

一〇九五年 二十三歳 大原へ隱棲。浄土教に関心。円仁の声明梵唄を学び、諸流を相伝する。

一〇九九年 二十七歳 『讚阿弥陀仏偈』の手沢本に「良忍」と記す。

凝然の『声明源流章』に良忍を次のように述べる。⁵

大原良忍上人。

本覚房、尾張国の人なり。本は叡山東塔阿弥陀坊の堂僧なり。慈覚大師、声明を弘伝して以後、おのおの一曲に達し、習学練磨して名を飛す。良忍上人、かの哲に謁し、習聚精研して以て一と為し、流伝弘通す。即ち大原に於て來迎院を建立し、興福寺の内梵音を除き、余のもろもろの音曲を譜練一統す。

良忍についての先行研究も多くある。仏教史研究を主としたものであり、石田瑞磨氏によれば次のとおりである。

良忍が天台円戒相承血脉譜に名を連ねる円戒の師匠であったことは注目されねばならない。そしてこの円戒相承が西塔黒谷の叡空（生没年不詳）を経て、次代の新しい専修念仏を開創した法然（一一三三―一二二二）に手渡されたのである。

3、良忍手沢本の調査

良忍本の訓点本研究を中心とした語学研究には築島裕博士の次のものがある。⁷

佛種集卷上 一卷 如來藏（法1號 朱點）

金剛鉾論 一帖 如來藏（法58號 朱點・墨點）

三觀義 一帖 如來藏（法55号）

4、薬源について

良忍手沢本『讚阿弥陀仏偈』は天台僧の写経僧の薬源の手になるものである。薬源についての略歴等は未詳であるが、薬源については築島博士の調査がある。⁸

金剛般若經集驗記上中下 一帖 日光云海藏

讚阿弥陀佛偈 一帖 如來藏

安樂土義 一卷 如來藏

二 『讚阿弥陀仏偈』について

来迎院本は漢文体の本文に仮名訓と返点によって書写され、ヲコト点は見られないことを実地調査⁹で確認した。親鸞はこの書に拠って、和讚四十八首を述作したという。

『讚阿弥陀仏偈』の研究には左記がある。仏教史研究が中心である。

藤原凌雪『讚阿弥陀佛偈の古写本』（梅原勸学古稀記念論文集、一九五五年）

良忍手沢本が、平安時代に遡る讚偈、略論の古写本であることの紹介、検討を行い、敦煌本との比較を行う。

船山知山『讚阿弥陀佛偈和讚の研究』（顕真学苑出版部、一九三九年）

親鸞の和讚研究の一環としての書。

加来雄之著『大無量寿経の讚歌と問答』（真宗大谷派宗務部出版部、二〇二二年七月）

第一章『讚阿弥陀佛偈并論』の原初形態復元

第二節 曇鸞撰『讚阿弥陀佛偈并論』の原初形態復元の試み 二九頁

敦煌本と同系統と推測されるが、偈頌がほぼ完備している。写経した葉源による詳細な訓点が付されてることから当時のように読まれていたかを窺うために偈文に限って訓点を含めて翻刻。

加来氏の資料で示された諸本を示す。

敦煌出土大英博物館蔵スタイン本 卷子本

尾題「讚阿弥陀佛偈并論上卷」

敦煌出土龍谷大学蔵赤松文庫本 卷子本

尾題「讚阿弥陀佛偈并論上卷」

大原来迎院如来蔵良忍手沢本

内題「彌陀佛偈并論 羅什法師作」

無量壽傍奉讚亦 名安樂

南無阿彌陀佛

後世の書写本を示す。

教行信証

坂東本

曇鸞和尚造也（頭注）「贊阿：傍經」まで欠落
奉讚亦／曰安養

（親鸞聖人真蹟集成第二卷 一九七四年 法藏館 四四八頁）

専修寺本

讚阿弥陀佛偈曰 曇鸞和尚造
南无阿弥陀佛 釈名无量壽傍經／奉讚亦曰安養

（高田専修寺本教行信証 法藏館、一九七五年 四九二頁）

円空本模写本 大谷大学蔵天保十五年深草円空本模写本

表紙裏 讚阿弥陀佛偈一卷 曇鸞法師作

南無阿彌陀佛 釈名無量壽傍經／奉讚名曰安養イ

一丁表 讚阿彌陀佛偈一卷 曇鸞法師作 釋名无量壽傍經奉讚／亦名安養ト

南无阿彌陀佛

『讚阿弥陀佛偈』の奥書は次の通りである。

良忍手沢本（一〇九九）「良」と略称

康和元年十二月一日申時於大原報身房書寫功畢／同二日移點了／執筆僧藥源／願依此書寫功自他共生極樂國矣

円空本模写本（二八四四）「円」と略称

讚阿彌陀佛偈一卷／願以書寫力早生彌陀國／一校了／寛元々年後七月廿一日書寫了／釋圓空

深草霞谷眞宗律院開祖立信上人眞本摹寫即了／天保十五辰四月廿三日 同所 善福寺住僧良實／甲辰六月廿六日

講此偈了日良實學人舉贈之／雲華院大含領受／以爲藏本

最古本の良忍手沢本以降如何なる伝承、転写が行われてきたのか。諸本の本文、訓点の校異を作成し、その異同を見て各本の特徴を探っていききたい。以下、『讚阿弥陀仏偈』の偈文全行を比較する。（書写年代順に配列し、例は抄出とする。右訓・左訓は本行に入れて示す。返り点は省略する。数字は行数である。）

『親鸞聖人 真蹟集成』所収『教行信証』引用文（元仁元年（一二三四）「教」と略称

欠落箇所―第一段1・2行、十五段（29行）～二十一段（62行）、二十三段（67・68行）、二十五（72行）～二十八段（90行）、三十段（95行）～四十七段（178行）。

南條神興校正『讚阿弥陀佛偈』「南」と略称

『真宗 校本七祖聖教上』（明治十二年発兌）所収の『讚阿弥陀仏偈』を依拠本とした。

訓点については依拠本では不十分なため、依拠本を底本としている『昭和校訂七祖聖教』所収本に依った。

三 良忍手沢本、教行信証、円空本模写本、南條本の表記形式

本書の表記形式の特徴あるものを記述しておく。

1、漢文と訓点（仮名訓、返点）。附訓は次のとおりである。サンプルとして最初の4行を示す。

第一段1・2行

良忍手沢本

第一段1行 現在^{ニテ}西方^ニ去^ラ此界^ノ十萬億^ノ利安樂^ノ土^{アリ}

2行 佛世尊^ヲ号^ハ阿彌陀^ト我願^ヲ往生^シ歸^ス命禮

（返り点略、以下同）

教行信証本

第一段 1・2行 欠落

円空本模写本

第一段 1行 現在^ノ西方^ニ去^{レル} 此界^ヲ十萬億^ノ刹^ヲ安樂^ニ土^{アリ}

2行 佛世尊^ヲ号阿彌陀^ト我願^{シテ}往生^{セント} 歸命^{シテ}禮^ス

第二段 3・4行

良忍手沢本

第二段 3行 成佛^ニ已來^{タリ} 歷^{ケル}十劫^ヲ壽命^ヲ方將^ニ無^ク有^ル量^{コト}

4行 法身^ノ光輪^ヲ遍^{セリ}法界^ニ照世^ス 盲冥^ヲ故頂^ニ禮^{ツル}

教行信証本

第二段 3行 成佛^{ヨリ}已來^タ 歷^{ヘタマヘリ}十劫^ヲ壽命^ヲ方將^{マサニ}無^ク有^ル量^{コト}

4行 法身^ノ光輪^ヲ遍^{シテ}法界^ニ照世^ス 盲冥^ヲ故頂^ニ禮^{シタマフ}

円空本模写本

第二段 3行 成佛^{ヨリ}已來^{カタク} 歷^{ケル}十劫^ヲ壽命^ヲ方將^{マサニ}無^ク有^ル量^{コト}

4行 法身^ノ光輪^ヲ遍^{シテ}法界^ニ照世^ス 盲冥^ヲ故頂^ニ禮^ス

右の良忍手沢本、教行信証、円空本模写本の三本を対照するとその相違箇所が以下のように見られる。

第一段 1・2行の相違箇所

良忍手沢本

現在^ニ

去^テ

刹

佛世尊^ヲ

願^テ

往生

歸命^シ

円空本模写本 現在レ 去レル 刹シテ 佛世尊ヲ 願シテ 往生セント 帰命シテ

1・2行の相違箇所には本文の異同はない。円空本模写本には精しい附訓傾向が見られる。

第二段の3・4行の相違箇所

良忍手沢本 成佛ニ 已來 歴タリ 方將ニ 無 遍ゼリ 照世ノ 頂禮ツル

教行信証 成佛ヨリ 已來タ 歴ヘタマヘリ 方將マサニ 無ケム 遍シテ 照世スノ 頂禮シタマツル

円空本模写本 成佛ヨリ 已來カ 歴タリ 方將マサニ 無シ 遍シテ 照世スノ 頂禮ス

本文には教行信証本の「徧」字の相違があり、附訓状況では、良忍本が疎であり、他の二本が精しい様相を見せている。教行信証本に敬語使用の特徴がある。

2、左注(訓)

以下『大無量寿経の讚歌と問答』掲載の四本の校異に従って比較作業を行う。¹⁰

良忍手沢本の左訓

137 亮―右訓ニシテ、左訓リヤウ

良忍本手沢・円空本模写本の左訓

182 放―□ツニ (良)

放―ユルシテ (円)

教行信証の左訓

7 限齊―カキルヒトシ、12 業繫除―ナリワイツナクナリ、13 最―モトモ、15 明朗―ホカラカナリ、64 特異―コトニ
 スクルトモ、65―顔浴端政カラハセカヲハセナヲシタ、シ、65 精ヨシヨシ、179 誕ウム、180 閉フサク、180 扇アフキ、

181 伏承―シタカイウ ケタマハル、190 歸命稽首禮―ヨルオホセイタスカウへ
円空本模写本の左訓

13―艶ウルハシ／イロフ、26 恩―ウツクシ、34 流―メクル ナカル、54 雅―ウルハシ、67 敢―アヘテ／カシコマテ、
100 虔―ツ、シミ／ウヤマフ、103 入―サトルコトラ、137 亮―サヤケシ／アキラカナリ、143 縷―ロウ、148 列―ツラナリ
芬―カウハシ芳ニアヒテニホフ、152 朱紫紅緑―アカシムラサキナリクレナイミトリ、153 熨燐煥爛―カ、ヤキヒカリ
アキラカテル、159 彫綺―エル イロフ、164 耀―ヒカリカ、ヤク、170 澹―アラフ、170 綽―ヒロシ／ユタカナリ

良忍手沢本には左注は少なく、教行信証、円空本模写本には多い。南條本は少ない。平安時代の写経僧薬源は左訓に
までは附訓しなかったようである。これは個人的なものか、平安時代の一般的な附訓状況であるのかは判断できない。

3、完全訓と部分訓

各漢字に附訓する場合の附訓方法を確認する。

(四本比較)

良忍手沢本と教行信証が完全訓

(良) 181 承ウケタマハル

(教) 承シヨウシテ (右訓) ウケタマハル (左訓)

(円) 承ケテ

(南) 承シテ

教行信証が完全訓

(良) 14 光啓ヲ

18 得

69 慶フ

187 聞メテ

	(教)	光啓ケイヲ	(右訓)	ヒラク	(左訓)	得エシム	慶ヨロコハムコト	聞キカシメテ
	(円)	光啓ラク				得レハ	慶コヒ	(異文)
	(南)	光啓ヲ				得シム	慶ハンコト	聞カシメテ
	(良)	192 若干ナリ						
	(教)	若干ソコハクナラム						
	(円)	若干ナリ						
	(南)	若干ナラン						
	教行信証と南條訓が完全訓							
	(良)	69 諸				192 故		
	(教)	諸アラユルモノ				故マコトニ	(右訓)	コトサラニ
	(円)	諸ノ				故ニ	(左訓)	
	(南)	諸アラユルモノ				故マコトニ		
	円空本が完全訓							
	(良)	10 光澤ヲ				20 咸ク		
	(教)	光澤ヲ				咸ク		
	(円)	光澤キヨシ	(右訓)	マミル	ナタラカナリ	咸コト	咸ク	
	(南)	光澤ヲ				咸ク		
	南條本が完全訓							

(良) 6 光暁ヲ

(教) 光暁ウヲ

(円) 光照ヲ

(南) 光暁サトル

良忍手沢本は一字への附訓が疎であり、完全訓は他本に比べ比較的少ない。

(二本比較)

良忍本が完全実詞訓

(良) 121 垂タル 134 轉ウタ、 162 互タカヒニ 169 若コトシ 182 放ハナテ

(円) 垂ル、 轉タ、 互ニ 若シ 放テ

(南) 垂ル、 轉タ 互ニ 若シ 放チ

良忍本と円空本が完全訓

(良) 164 若コトシ

(円) 若コトシ

(南) 若シ

円空本が完全訓

(良) 39 潮ノ 89 曾シ 108 倫 138 周 139 更 151 盈テ 151 葉アリ

(円) 潮ウシホノ 曾ムカシ 倫トモカラ 周メクレリ 更カハル^レ 盈ミツ 葉ハアリ

(南) 潮ノ 曾テ 倫 周ネシ 更タ 盈ツ 葉アリ

(良) 171 微波

(円) 微タトフ妙

(南) 微波

円空本と南條本が完全訓

(良) 160 稱ヘリ 170 澹淡

(円) 稱カナフ 澹淡テムテムトシテ

(南) 稱カナヒ 澹淡タンタン

南條本が完全訓

(良) 47 詣テ

78 所須

85 須現ス

167 尋チ

(円) 詣

所須

須トスレハ復現ス

尋チ

(南) 詣イタル

所須モチユル

須モチイントスレハ復現ス

尋スナハチ

良忍手沢本にも完全訓が見られるが少ない。左注が少なかったことと同傾向で、これは薬源の個人的な附訓方法か、平安時代の一般的な附訓状況であるのか、当時の他の訓点資料の検討が必要である。

四 良忍手沢本の言語特徴

良忍手沢本の言語特徴を、他本と比較する形で記述する。

1、和語(和訓)・漢語(字音訓)

(四本の比較)

良忍本が和語―教行信証・円空本・南條本が漢語

	(良)	7号ル	71願フ	191号ク	193歸ルハ	194讚ム
	(教)	号ス	願スト	号ス	歸スルハ	讚ス
	(円)	号ス	願ス	号ス	歸スルハ	讚スルニ
	(南)	號ス	願ス	號ス	歸スレハ	讚シテ
	良忍本が和語―教行信証、南條本が漢語					
	(良)	9号ル	11号ル	13号ル	23号ル	27号ル
	(教)	号ス	号ス	号ス	号ス	号
	(円)	号	号	号	号	號ス
	(南)	號ス	號ス	號ス	號ス	号ス
	良忍本、円空本が和語―教行信証、南條本が漢語					
	(良)	5号ツル				
	(教)	号ス				
	(円)	号ツク				
	(南)	號ス				
	良忍本、教行信証、南條本が和語―円空本が漢語					
	(良)	64故ニ別ク				
	(教)	故ニ列ツラス				
	(円)	故□別ノ				
	(南)	故ニ列ヌ				

(南) 彫綺

所欲ノ

烈ス芬芳ヲ

良忍本が和語―南條本が漢語

(良) 17号ル

(円) 号

(南) 號ス

良忍本、円空本が和語―南條本が漢語

(良) 川運テ

(円) 運テ

(南) 運シテ

良忍本、南條本が和語―円空本が漢語

(良) 76 喩ルニ 133 稱ハカル

(円) 喩スルニ 稱ス

(南) 喩フルニ 稱ハカル

良忍本が漢語―円空本、南條本が和語

(良) 39 不暫クモ息セ 146 觸シテ

(円) 不暫クモ息マ 觸ルニ

(南) 不暫クモ息マ 觸レテ

良忍本、南條本が漢語―円空本が和語

(良) 68 讚スルカ 42 究暢シテ

(円) 讚ム 究メ暢テ

(南) 讚シ玉フ 究暢シテ

良忍本、円空本が漢語―南條本が和語

(良) 32 欲ヲハ

(円) 欲スルヲハ

(南) 欲ハムヲ

良忍手沢本に和語による訓読が多いことは前項と同じである。

2、敬語法

(四本の比較)

良忍本、教行信証、南條本が敬語あり―円空本に敬語なし

(良) 186 令タマヘ

(教) 令メタマヘ

(円) 令メヨ

(南) 令玉ヘ

良忍本、円空本に敬語なし―教行信証、南條本に敬語あり

(良) 3 來歴タリ

4 頂禮ツル

6 稽首ツル

8 稽首ツル

(教) 來タ歴ヘタマヘリ

頂禮シタテマツル

稽首シタテマツル

稽首マツル

(円) 來カタ歴タリ

頂禮ス

稽首ス

稽首ス

(南) 來歴玉ヘリ
頂禮シ上ル
稽首シ上ル
稽首シ上ル

(良) 10 頂禮ツル
15 色超絶セリ
28 讚ツルニ
70 廻向シテ

(教) 頂禮マツル
色超絶シタマヘリアリ
嘆シタマフコト
回向シタマヘリ

(円) 頂禮
色超絶ス
讚シテ
廻向シテ

(南) 頂禮シ上ル
色超絶シ玉ヘリアリ
歎シ玉フコト
廻向シ玉ヘリ

良忍手沢本には訓読に際しての敬語使用は少ない。教行信証などが多いのとは対照的である。良忍本は一字ごとに即した施訓が見られる。文脈に即した訓読方法ではなく、親鸞がそうした方法とは対照的である。

(三本の敬語法)

良忍本に敬語あり―円空本、南條本に敬語なし

(良) 157 安タマフ

(円) 安ス

(南) 安ス

良忍本、南條本に敬語なし―円空本に敬語あり

(良) 50 供養ス
96 観ル

(円) 供養スルコト
観シ上テ

(南) 供養シ上
観シ

良忍本、円空本に敬語なし―南條本に敬語あり

(良) 2号
2 禮ス
30 稽首ル

(円) 号ス 禮ス 稽首
 (南) 號シ上ル 禮シ上ル 稽首シ上ル
 良忍手沢本には訓読に際しての敬語使用は少ない。

五 良忍手沢本、教行信証、円空本模写本、南條本の本文比較

1、本文の比較

(1) 四本(良・教・円・南)の相違箇所
 異文箇所

(良) 187 徳ヲ者ハ

(教) 功德ノ音一ヲ

(円) 願聞_下シメム十方諸ノ有縁_二

(南) 功德音一ヲ

良忍本―教行信証、円空本、南條本と異なる

語の相違箇所

(良) 6 光照	21 處	26 來佛	91 佛号	187 者ハ
(教) 光暎	時	成佛シ	徳號	音ヲ
(円) 光暎	時	感シ佛	佛名	(異文)
(南) 光暎	時	成佛シ	徳號	音ヲ

漢字の相違箇所

(良) 91佛号| 187佛恵| 188無ケム
(教) 徳號| 佛慧| 无ラシメム
(円) 佛名| (異文) 无シ
(南) 徳號| 佛慧| 無カラシメム
良忍本、教行信証、南條本、一円空本と異なる
語の相違箇所

(良) 23除テ| 26因テ
(教) 除テハ| 因テ
(円) 降シタカテ| 恩|
(南) 除テハ| 因テ
良忍本、円空本、南條本一教行信証と異なる
語の相違箇所

(良) 65端正ニ□□
(教) 端政ニシテ
(円) 端正ニシテ
(南) 端正ニシテ
良忍本、円空本一教行信証、南條本と異なる
語の相違箇所
(良) 11滅ス| 26讚| 28讚ツルニ

(教) 无シ 嘆シ 嘆シタマフコト

(円) 滅ス 讚 讚シテ

(南) 無シ 歎シ 歎シ玉フコト

良忍本、教行信証、円空本―南條本と異なる

語の相違箇所

(良) 69 徳号ヲ

(教) 徳号ヲ

(円) 徳号ヲ

(南) 佛號〔ヲ〕

最古本の良忍本と本文が異なるものに視点を当てて見ると、大幅な異文というものは少ない。『讚阿弥陀仏偈』の異本は生じなかったものと見られる。良忍本のみ後世の他本と異なるものも存在する。他の多くは「佛惠―佛慧」「端正―端政」の如く転写の際の微妙な誤写等が多いようである。平安時代以降『讚阿弥陀仏偈』の伝承、転写はどのような過程を経て来たのか。本文の相違箇所を一層精査して見る必要がある。

(2) 三本(良・円・南)の相違箇所(教行信証の欠落箇所)

良忍本の本文が他本と異なることも多い。良忍本と各本とは別系統を経てきたものであろうか。

異文箇所

(良) 46 如是功德无邊量

(円) 如是功德无シ邊量

(南) 生^ニシテ安樂國^ニ成^{ニス}大利^ヲ (異文)
 良忍本―円空本、南條本と異なる

漢字の相違箇所

(良) 48 算^レ數 101 佛^レ惠^ヲ 154 花^ノ中^ニ

(円) 算^レ數 佛^レ慧^ヲ 花^ノ中^ニ

(南) 算^レ數 佛^レ慧 華^ノ中^{ヨリ}

語の相違箇所

(良) 74 傷^レ比^フ 85 後 149 設^レシテ 162 自^レ銀^ノ

(円) 復^レ比^ス 須^トスレハ 没^スルコト 白^レ銀^ノ

(南) 復^レ比^ス 須^レモチイ^{ント}スレハ 没^シテ 白^レ銀^ノ

良忍本、南條本―円空本と異なる

漢字の相違箇所

(良) 52 小^キ者^ノハ

(円) 少^ク者

(南) 小^ナル者

語の相違箇所

(良) 50 能^ク名^{コト} 59 捨^ツ 103 八^ノ梵^ノ聲 139 互 161 池^ノ中^ニ 167 若^レ須^ヘキニハ 173 諸

(円) 能^ク絶^ルモノ 誓^ス 入^レ梵^ノ聲 更 其中^ニ 善^レ須^{ヨク}キレハ 隨

(南) 能^ク名^ルコト 捨^ツ 八^ノ梵^ノ聲 互 池^ノ中^ニ 若^レ須^{モチ}イハ 諸

良忍本、円空本―南條本と異なる

漢字の相違箇所

(良)	45他方ノ	60燃モヤシテ	85所着	101歌嘆ル佛ヲ	108過キ	118周圓ノ
(円)	他方ノ	燃モシテ	所着	歌嘆シ佛ヲ	過タリ	周圓セル
(南)	佗方	然トモシテ	所著	歌歎シ佛ヲ	過キタリ	周圓

語の相違箇所

(良)	38神通ヲ	43不可説ナリ	77故ナリ	135千億萬倍ナリ	163聲ヲ
(円)	神通ヲ	不可説ナリ	故セハ	千億萬倍ナリ	聲ナヲ
(南)	欠文	不可計ナリ	爲セル也	前二億萬倍	馨カホリヲ

漢字「小―少、他―佗、燃―然」等は誤写の域である。他は本文に大きな異文は生じていない。

六、良忍手沢本、教行信証、円空本模写本、南條本の訓点の比較

1、自立語訓の異同

(四本の比較)

良忍本と円空本が同訓―教行信証、南條本が異なる

(良) 70者モノ

(教) 者ヒト

(円) 者(モノ)

(南) 者ヒト

良忍本、教行信証、南條本同訓―円空本が異なる

(良) 185 滞ト、□マルモ

(円) 滞コホラム

(南) 滞マル

(教) 滞ト、マル

(三本の比較)

良忍本、円空本、南條本が同訓

(良) 53 僂ミナ 59 汎ウカヘル 83 儻タチマチニ

(円) 僂ミナニ 汎ウカヘル 儻タチマチ／ニワカニ

(南) 僂ミナ 汎ウカヘル 儻タチマチ

良忍本、円空本、南條本が別訓

(良) 60 燃モヤシテ 60 猶コトクシテ 167 灌ソ、ク

(円) 燃モシテ 猶ハカリ 灌ス、ク

(南) 然トモシテ 猶シ 灌ク

良忍本、南條本が同訓―円空本が別訓

(良) 116 阻ヘタテ 133 稱ハカル

(円) 阻サカシキ 稱ス

(南) 阻ヘタテ 稱ハカル

自立語訓を比較してみると、「者モノ―ヒト、阻ヘタテ―サカシキ、猶コトクシテ―ハカリ、稱ハカル―ス」等の別訓

も見られるが、同一訓も多い。後世の訓の転写の方法には忠実に訓まで転写する場合と、本文を写して訓はある程度書写者の任意に附訓する場合がある。『讚阿弥陀佛偈』の場合は後者の書写方法のように見える。

2、付属語等の附訓の異同

(四本比較)

良忍本のみが異なる訓―教行信証、南條本、円空本が同訓

(良)	4 遍セリ	8 離タリ	92 具足シツ□	193 帰命ツルナリ	65 精微妙ナル軀ミ
(教)	徧シテ	離ル	具足スト	帰命スルナリ	精微妙軀クニシテ
(円)	遍シテ	離ル	具足スト	帰命スルナリ	精微妙軀ニシテ
(南)	遍シテ	離ル	具足スト	帰命スル也	微妙軀ニシテ

(良) 17 被テ 70 願スル 91 帰依ス

(教) 被カフラシメ 願スレハ 帰依スレハ

(円) 被ラシメテ 願スレハ 帰依スレハ

(南) 被ラシメ 願スレハ 帰依スレハ

良忍本、円空本が同訓―教行信証、南條本が同訓

(良)	22 不斷	24 讚テ	180 関閉邪扇ヲ	189 往生セム
(教)	不スシテ斷ヘ	嘆シ	関クワン閉ヘイシテ	往生セシメム
(円)	不斷ナレハ	讚メテ	関クワン閉邪扇ヲ	往生セム

- (南) 不シテ斷エ 歎シ 関閉シテ邪扇ヲ 往生セシメン
- 良忍本、円空本が別訓—教行信証、南條本が同訓
- (良) 9 無コト礙 25 離相 26 所カ讚 63 洞達ス 69 慶フ
- (教) 无礙ナルコト 離タルコト相ヲ 所ナリ嘆シタマフ 洞達セリ 慶ヨロコハムコト
- (円) 无礙ニシテ 離テ相ヲ 所ラル讚 洞達シテ 慶コヒ
- (南) 無礙ナルコト 離レタルコト相ヲ 所ナリ歎シ玉フ 洞達セリ 慶ハンコト
- 良忍本、教行信証、南條本が同訓—円空本が別訓
- (良) 6 蒙ル 10 14 蒙ル 16 蒙ルニ 26 因テ 26 赫然タリ 194 願ハ
- (教) 蒙ル 蒙ル 蒙フルニ 因テ 赫カク然タリ 願ハ
- (円) 蒙レハ 蒙テ 蒙レハ 恩ウツクシ(左訓) 赫然トシテ 願ヲ
- (南) 蒙ル 蒙ル 蒙ルニ 因テ 赫然タリ 願クハ
- 良忍本—教行信証、円空本、が同訓—南條本が異なる
- (良) 71 正法ヲハ
- (教) 正法トオハ
- (円) 正法トヲハ
- (南) 正法ヲ

良忍本のみ異なる訓も多く、教行信証の訓とも異なるものも多い。両書の訓の伝承の関係は薄いと見られる。良忍本が「(良) — (教) 〓 遍セリ— 徧シテ、離タリ— 離ル、具足シツ□— 具足スト、帰命ツルナリ— 帰命スルナリ」のような助動詞を付加してより意味を詳しくしようとした箇所も見られる。

一方良忍本が一字の訓に即したもので、教行信証が文脈に沿った附訓が見られる箇所もある。「(良) — (教) 被テ — 被カフラシメ、願スル — 願スレハ、帰依ス — 帰依スレハ」

(三本比較)

良忍本のみが異なる訓 — 円空本、南條本が同訓

(良)	41 生シテ	41 悉具ナリ	45 示現シテ	50 散華ヲ	52 覆コト	53 次ニ
(円)	々 (生) ス□ハ	悉く具ス	示現スルコト	散華シテ	覆フ	次ヲモテ
(南)	生スレハ	悉く具ス	示現スルコト	散華シテ	覆フ	次ヲモテ
(良)	54 頌揚ス	74 竝ヒ	89 攝取セリ	102 花ト衣トヲ	112 所テ合成ニセ	113 本願力ヲモテ
(円)	頌揚アク	竝ヘ	攝取ス	花衣ヲ	所ナリ合成スル	本願力ノ
(南)	頌揚ニアク	竝ヘ	攝取ス	華衣ヲ	所ナリ合成スル	本願力ノ
(良)	120 衆寶之王ニシテ	121 垂タル	122 覆ヘリ	126 廣大シテ	129 對ルニ	
(円)	衆寶之王ヲモテ	垂ル、	覆フ	廣大ニシテ	對スルヲ	
(南)	衆寶之王ヲ以テ	垂ル、	覆フ	廣大ニシテ	對スルヲ	
(良)	142 遍覆セリ	143 爲セリ	152 无量ニシテ	160 相ヒ僞ヘリ	173 或聞ク	
(円)	遍ク覆ヘリ	爲ス	无量ナリ	相僞カナフ	或ハ聞キ	
(南)	遍ク覆ヘリ	爲ス	無量ナリ	相僞カナヒ	或ハ聞キ	

良忍本、円空本が同訓、—南條本が別訓

(良) 1 安樂土アリ 51 晃耀ス 109 逐フ香風ヲ 112 廣大ニシテ 115 超タリ千ノ日ニ 115 莊嚴ヲ

(円) 安養土アリ 晃耀ス 逐ヲフ香風ヲ 廣大ニシテ 超タリ千日ニ 莊嚴ヲ

(南) 安樂土ニ 晃耀シテ 逐ヒ香風ヲ 廣大ナルコト 超ユ千日ニ 莊嚴ニ

(良) 129 成佛マテ 134 至マテ 149 還テ

(円) 成佛マテ 至マテ 還テ

(南) 成佛ニ 至ル 還タ

良忍本、南條本が同訓—円空本が別訓

(良) 35 若シ 79 受用ノ具ヲ 106 悟入シ 107 四面ヨリ 107 撃動シテ 115 圓菴セリ

(円) 若クシテ 受用スルコト具サナリ 悟入ヲ 四面ニ 撃チ動スニ 圓菴スレハ

(南) 若シ 受用ノ具ニテ 悟入ス 四面ヨリ 撃動シテ 圓菴セリ

(良) 116 谷ノ阻ヘタテ 124 微風吹テ 134 妙ニシテ 143 奇異ノ

(円) 谷ノ阻サカシキコト 微風吹クニ 妙ルニ 音異ニシニ

(南) 谷ノ阻ヘタテ 微風吹テ 妙ニシテ 奇異ノ

良忍本、円空本、南條本がすべて別訓

(良) 1 去テ 119 布ケル 140 吹テ 163 垂レ布リ

(円) 去レルコト 布テ 吹ケハ 垂レテ布ケリ

(南) 去ルコト 布クコト 吹クニ 垂レ布キ
 良忍本のみ異なる訓も多い。又、三本すべて異なるものもある。良忍本の訓の伝承は見られないと判断される。

3、言語の諸比較

(1) 時代的言語の反映。

i 再読文字の訓法

良忍本には「應」字を再読する訓法はない。平安時代書写故の時代的特徴を反映している。教行信証以下の本には再読の用法が見られるのは鎌倉時代以降の訓点本故である。

(良) 93 亦應シ直ニ過スキテ聞佛ノ名ミナヲ―再読無

(教) 亦應シ直ニ過テ聞ニク佛ノ名ニヲ―再読有

(円) 亦應シ直ニ過テ聞ク佛名ヲ―再読有

(南) 亦應ニ直ニ過テ聞ニク佛ノ名ニヲ―再読有

ii 音便の表記

促音便表記

良忍本には「ツ」がなく促音便が無表記であり、江戸時代の円空本には「ツ」表記が見られる。鎌倉時代の教行信証には今回の箇所には見られない。

(良) 184 循メクテ ―無表記

117 若佛ノ

(円) 循シタカツテ―「ツ」表記

若シタカツテ佛 ―「ツ」表記

(南) 循メクリテ

若シ

(2) 地域的言語の反映。

ウ音便表記

(良)	192 隨ニ	(良)	49 從テ	78 欲ニ	123 隨テ	168 調和	168 悅シテ
(教)	隨フ	(円)	從テ	欲ヲテ	隨テ	調ト、ノホテ	悅フテ
(円)	隨カ	(南)	從フテ	欲ニ	隨フテ	調和	悅ハシメテ
(南)	隨フテ	ウ音便表記					

円空本が「ホテ・フテ、ヲテ、南條本が「フテの音便表記が見られる。書写者の地域性の反映とみられる。

おわりに

本稿は来迎院蔵『讚阿彌陀佛偈』の言語に視点を当てた記述であったが、良忍、薬源という平安時代の天台僧や、それ以降の親鸞他の諸本から本書を伝承しようとした力を感じるものであった。

大谷大学真宗総合研究所の二〇一二年一度一般研究（共同研究）調査に、高著『大無量寿経』の賛歌と問答』を示され参加を促され、機会を頂いた代表者加来雄之教授に御礼申し上げます。同書中の資料集『讚阿彌陀佛偈』三本対照表』の作成に参加された若き研究員小松肇・宮谷啓法・藤原智氏の学恩に感謝申し上げます。

天台宗、魚山来迎院の齋藤孝圓師には貴重な御所蔵本の閲覧許可のご配慮を頂いた。学恩に感謝申し上げます。尚、本稿は同研究所にて行った調査結果の研究発表（二〇二二年十月十七日（水）、二〇二三年二月二日（水））に基づいてまとめたものである。席上種々ご教授頂いた共同研究者に御礼申し上げます。また、同研究所の事務局、日野純悟氏には終始多大なお世話を頂いた。共に記して御礼申し上げます。

註

- 1 築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』（汲古書院、一九九六年五月）（三三～三五頁）
- 2 『来迎院如来蔵重書目録』（東京帝国大学史料編纂所）三九三本。
『来迎院如来蔵聖教文書類目録』（文化庁文化財保護部美術工芸課編、謄写版、一九七二年）
文化庁の一九七二年古文書特別調査資料 五三九本。
- 3 韓普光『新羅淨土思想の研究』（東方出版、一九九一年）
- 4 横田兼章「良忍上人略年譜」（『良忍上人の研究』）
- 5 註6石田瑞麿氏より引用。三五九頁
- 6 融通念仏宗教学研究所編『良忍上人の研究』（百華苑、一九八一年）
佐藤哲英・横田兼章「良忍上人伝の研究」
横田兼章「大原如来蔵における良忍上人関係資料」
小寺文頼「良忍上人作『略布薩次第』の研究」
白土わか「良忍上人と曼殊院本『出家作法』」
石田瑞麿「空也・良源・源信・良忍」（『浄土仏教の思想』第六卷、講談社、一九九二年）
築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』（汲古書院、一九九六年五月）に良忍の書写本の調査が示されている。
佛種集卷上 一卷 如来蔵（法1號）朱點（11030003）
（奥書） 康和五年八月十日未剋於睿山檀那院實報房／書寫功了 比丘良忍
（朱書）「同剋移點了 比較了」
金剛鉚論 一帖 如来蔵（法58號）朱點・墨點（11070007）
（奥書） 嘉承二年四月廿三日始之五月一日寫之了 良忍
江戸時代の貼紙に「延暦寺點」と題して寶幢院點の點圖三壺が記されてゐる。
三觀義 一帖 如来蔵（法55號）（11005058）（天台系）
（奥書） 保安二年（一一二二）二月廿九日「校」了
兜率僧覺超の本奥書があり、古包紙の表書に「良忍上人筆」とある。

- 8 築島裕『平安時代訓點本論考 研究篇』（汲古書院、一九九六年五月）
金剛般若經集驗記上中下 一帖 日光天海藏（1113005）
（奥書）天 仁四年（一一一一）五月六日巳時於大原來迎院／廊書寫了 桑門藥源等
（朱書）『康和五年十一月二』（以上朱消）天永四年（一一二三）六月二日午時點了
讚阿弥陀佛偈 一帖 如來藏藏（10990006）
（奥書）康和元年（一〇九九）十二月一日申時於大原報身房書寫／功畢 執筆僧藥源／（別筆）「同二日移點了」
安樂土義 一卷 如來（1100001）（天台系）
（奥書）康和二年（一一〇〇）二月四日未時許書寫了／同月六月巳時許於大原草菴移點了桑門藥源
9 大原來迎院如來藏良忍手沢本『讚阿弥陀佛偈』『略論安樂土義』調査
大谷大学真宗総合研究所協同研究加來班の实地調査、二〇一三年三月六日。
加來雄之・藤原智・青柳英司・宮谷啓法・小松肇・金子彰
10 小松肇、宮谷啓法氏、藤原智氏作成の資料に負うところが多かった。（二〇〇頁以下、二三六頁～二六二頁）

